

5 漢方薬成分の前立腺癌骨転移に 対する創薬研究の可能性

帝京大学医学部 泌尿器科¹⁾、神戸大学医学部整形外科²⁾、
Graduate Institute of Translational Medicine, College of Medical
Science and Technology, Taipei Medical University³⁾、
Department of Urology⁴⁾ and Pediatrics⁵⁾、
Taipei Medical University Shuang Ho Hospital
Institute of Medicine, Chung Shan Medical University⁶⁾

重村 克巳¹⁾、武井 紀樹¹⁾、石谷 典子¹⁾、
由留部 崇²⁾、呉 明恒³⁾、陳 冠州⁴⁾、
方 旭彬⁵⁾、宋 賢穎⁶⁾、中川 徹¹⁾

前立腺癌では近年アンドロゲン受容体をターゲットにした新規ホルモン治療薬が複数種類に渡って出現し、治療ガイドラインも複雑な様相を呈している。発表者は以前から漢方薬もしくはその成分に着目し、それを使用しての骨転移性前立腺癌の制癌作用の研究に取り組んできた。少し古い研究ではあるが、厚朴の成分であるホノキオールがin vitroならびにin vivoでの去勢抵抗性前立腺癌ならびに同骨転移モデルにおいてアポトーシスを誘導しながら腫瘍の増殖を抑制することを示した。同時にホノキオールと抗癌剤であるドセタキセルとの併用でのさらなる制癌作用の相乗効果も示した(Shigemura et al. Cancer 2007)。さらに近年の研究においてもホノキオールは、癌浸潤・転移のメカニズムの1つである上皮間葉転換を抑制しながら前立腺癌細胞への制癌作用を示し、さらに免疫系の関与も示唆された(Jotasu, Shigemura, et al. Oncology 2023)。これらの研究共にマウス実験を行ったが、明らかな副作用を認めなかった。発表時には現在のトピックや最新の研究なども含めて、提示したい。